

第99回全国高校サッカー選手権大会に優勝して

山梨学院高校サッカー部 総監督 横森 巧

何故か優勝できた。そんな思いに浸っているとき、日体大サッカー部同窓会事務局から連絡をいただき「何か書け」とのことでした。

同窓会事務局には、常日頃、多くのご苦勞をしていただいているため、いやとも言えなく、文章には自信はないが、優勝した責任上、引き受けることとしました。

電話をいただいたころは多くの人たちからお祝い連絡や、講演依頼もあり対応をしているうちにすっかり忘れてしまい、原稿が遅くなり失礼したことを痛感しているところです。

高校サッカーをこんなにも多くの人たちが興味を持って見ている、優勝すると使ってくれるものだと改めて感じた次第です。

新型コロナの影響を受け、事務局も動きが止まっているかのように思いましたが、大会期間中それぞれの場所で役員や関係している人たちと出会い、日体大関係者の頑張りを感じたことが多々あり嬉しく思いました。同窓会の活動も、コロナ収束のその時が来るまでは、我慢しかないとは思っていますが、わが同窓会のすそ野は確実に広がっていると思えました。

さて、選手権ですが、様々な制限があり異様な大会でした。大会本部の方々は日々慎重に進行しなければならず頭が痛い思いではないかと感じました。

大会の開会式は1回戦前に、それぞれの会場で大型スクリーンを使っての式典でした。試合前であったが、それなりの緊張感もありサッカーならではの工夫だと感じながら参加していました。

1回戦から応援は関係者のみ、広いスタンドに部員と一部の保護者しかいないというのは、何か物足りなさを覚えたものです。これまでだとベンチの声も行き届かない応援状況でしたが、試合は、静かでベンチの声もよく通り選手も普段通りできたように思っています。

私たちチームの対戦相手は、1回戦から各チームの主将が「優勝」を口にしていないチームばかりで初戦から敗退を覚悟もして臨んでいました。

1回戦の米子北は、以前に対戦し、わがチームはその時負けていましたから、作戦は理解していました。徹底的に守備ラインの裏に蹴って走る駒沢大学みたいなチームでした。

1回戦というのは次に進むうえで入りが難しいこともあり、双方蹴って走る力任せの

サッカーは切り替えのスピードこそありましたが、技術レベルで見るとあまり味のある内容ではありませんでした。が「勝ち」を得ることができたのは高さであったと思えます。

2回戦の鹿島学園戦は、苦戦するだろうと思っていました。4月頃のトレーニングマッチでは、手足が出ないくらいの差があり彼らも楽勝と思っていたのではないかと思います。私もここで終わりかと腹をくくっていました。しかし、我がチームの選手は何故か素晴らしい粘りで1点を死守しました。必死が一生懸命となり、ゴールパー、ポストまでが味方になったような気がいたしました。

3回戦の藤枝明誠戦は、3戦目のためチーム全体の疲労もあり、難しさを痛感しました。動きも甘く、流れもよくない中で、相手 GK の凡ミスで先取点を挙げることができましたが、PK 戦となったとき何故か勝てそうな気がしました。ラッキーなゲームでした。

優勝候補の一つ昌平戦ですが、抜群の技術とコンビネーションはかつてクライフ率いるオランダ代表のトータルフットボールを思わせる動きとチームでした。このチームにも高さという弱点がありました。

準決勝・決勝の埼玉競技場は、2日前の1月7日に国から新型コロナウイルス感染防止のため緊急事態宣言が出たばかりで、登録選手のみとなりました。スタンドは全く無人の異様な雰囲気での戦いでした。

私は、こんなに無理をしてまで大会をする必要があるのか疑問に思いました。

高校のクラブは、こうした晴れ舞台で頑張りたいとトレーニングに励んできていると思う。そして、多くの部員が皆で助け合い、競い合っただけの運動部活動ですが、その部員の仲間意識も出せない、見られない、そんな雰囲気の競技場では残念に思えました。

結果は、決勝まで2戦とも PK 戦でした。両チームとも技術は高く運動力もあり個々が質の良いサッカーをしていました。我々のチームは、粘って少ないチャンスを得点に結びつけ、同点にするのが精一杯でした。

私たちが、勝ったというより、PK 戦になったとき、私たちチームの選手のいけるぞという感じが、最後まで行けたと思っています。当然、決勝まで進めるにはそれなりの努力と工夫はして戦いに臨んでいます。大きく左右したのは何故か強運であったということ以外に考えられません。

私は、今年で79歳になります。長い間サッカーに関わり楽しんできましたが、こんな良いことも起こるのだ、と神に感謝したものです。

1回戦から決勝までの約2週間ホテルから外出もできなく、この間、普段の生活が勝敗にも影響はあったとも思えます。縁起を担ぎ同じものを食したり、行動も時間のことも気

にしたりと緊張とリラックスのすみわけも大切に思えました。こうした行動(自主性)は、それぞれ遠征などを通して、各選手は学んでいることだと思えます。

大会を通して感じることは、マスコミ対応の重要性を痛感しています。それゆえに選手も行動、対応が大切と感じました。高校生らしくさわやかで多くの方に応援していただける高校サッカー観を持たせることが大切です。

多くのチームを見てきました。高校生として技術も戦術理解もできている選手も多くみられました。しかし、日本のサッカーを下支えする高校サッカーとしての意味で、もっともっと努力、工夫を重ねレベルアップをして周りから認められていく組織や強化のための行動も大切と思っています。

同窓生の皆さん、継続は力といますが、その努力や行動は必ず次に生きてくると思っています。良い選手、面白い選手、力強いチームを作ってください。

同窓生の皆様をご健勝で益々のご活躍を祈念して終わります。